

日常を回復する

7月12日から、再び東京都において緊急事態宣言が発出されました。正直なところゲンナリです。今、世界中の人がゲンナリしています。私は性格が悪いので、IOCのエライ人たちにもぜひ心からゲンナリしていて欲しいです。

それはともかく、私は2013年に研究仲間と共同で『科学化する日常の社会学』という本を出しました。この本で、私は2009年に発生した新型インフルエンザに関する報道を題材に、「シナリオ」という形式で流布される科学知のあり方を論じました。今のコロナ禍と比べれば、2009年の新型インフルエンザはそれほど大きな危機でもなかったように感じますが、危機感という意味では同じくらいだったように思います。専門家の科学知がマスメディアなどによって通俗化され、人々に歪んだ理解が形成されてしまう問題は基本的に変わっていません。人々の生活に科学知が浸透することは、人々が正しく科学知を理解することを必ずしも意味しません。科学知といえども「神話」として作用するのです。

さて、「待ち焦がれる日常」というのがこのシリーズのタイトルです。日常とは、「明日は今日とたいして違わない」のを疑いもせず生きていける日々のことです。しかし今、私たちは毎朝マスクをつけるたびに危機を意識せずにはられません。マスクは私たちをウイルスから守る一方で、その内側に危機の気分をため込みます。できるなら、一気にまとめて吐き出したいところです。

上に紹介した本の執筆者の1人である私の友人は、災害ボランティアの研究をしています。彼曰く、災害はまちや暮らしだけではなく、人々の日常をも破壊します。だから、復興とは単に建物がきれいに建て直され、道路が整備され、鉄道がまた走り出すことではなく、何より重要なのは被災した人々が日常を回復する（または新たな日常を作り出す）ことなのです。「明日もまた」と素朴に信じられるようになることです。ボランティアとは被災した人々が新たな日常を作り出すのに寄り添うことであり、ただ寄り添っているだけで意味があるのだそうです。

新型コロナウイルスは、私たちがただ人と寄り添うことすら難しくしています。万能ではありませんが、ワクチンの接種は私たちが人と寄り添う経験を取り戻すための一つの手立てです。もちろんワクチンの接種にも副反応などのリスクが伴います。ワクチンを打つにせよ打たないにせよ、自分自身の体調や健康状態を考慮して、自分の選択がもたらすリスクを理解しなくてはなりません。どうか安直な陰謀論を信じないで（それは科学を「神話」にしているから）、冷静に接種するかしないかの判断をしてください。接種しないとしても、それは自由な人格が判断した結果として尊重されるべきなの言うまでもありません。

私自身は、日常を取り戻すためにできることをしようと思います。とはいえ、1回目も翌日はけっこう痛かったんですけど。

7月14日 教員 K. T.